図書名	受験番号	氏名
参考文献:加藤浩美著「たったひとつのたからもの」文藝春秋 2003年		

この本で紹介されている秋雪くんは、生後一週間にダウン症と診断され、同時に重い心臓障害を抱えていた。寿命は良くても一年と医者から宣告されていたが、秋雪くんはその宣告より長く、六年生きた。この本はその六年間の記録が写真とともに綴られている。

まず、この本が刊行されることになったきっかけは、一枚の写真が「幸せな瞬間」というテーマで募集された明治生命のCMに採用されたことである。「たったひとつのたからもの」という作品名が付けられた一枚の写真には、秋雪くんのことだけでなく、写真を撮ったときの家族三人の存在そのものに想いを込めたと述べられている。父親が子供を抱き、海を見て微笑んでいる様子は、本当に嬉しそうで幸せだったことが確かに窺える。そして私はその秋雪くんが六年間生きたのは、両親はもちろん、学園の先生方の力添えが背景にあると考えている。本来その学園に通えるのは原則として「歩行可能な子供」であった。しかし、学園の先生方の熱心な勧めにより入園できることになったのだ。そしてその先生方は秋雪くんの診察に付き添い、障害について理解するということも行っていた。保育士は、健全な子供達だけでなく、障害や病気を持った子供達にもきちんを対応していかなければならない。この学園の先生方の対応は子供とその両親のことを考えた、とても良いものであると感じた。また、その学園での日々は秋雪くんの世界を拓けるという意味でとても良い経験だったとも思う。特に印象に残ったのは、運動会のかけっこの場面である。秋雪くんは走れないため先生に支えられて、ゴールに向かって一歩ずつゆっくり歩いていく。その様子は写真にも撮られていて、頑張って一生懸命歩いている様子やゴールした後に先生に抱えられ嬉しそうに笑う様子に感動した。

最後に、「人の幸せは、命の長さではないのです」という小児心臓病専門医の言葉が紹介されている。私はこの本を総合して伝えたかったことはこの言葉の意味だと考える。秋雪くんは短い命だったが、両親や学園の先生方に支えられ幸せな日々を送った。私はこの本を通して、障害を持つ持たないにかかわらず、幼児教育を必要に応じて施すことの重要性を切実に感じることができた。